

こだわってもこだわらなくても

松田妙子



私は幼児期のトラウマによって、男女の恋愛をおどましいものと感じる癖がついてしまいました。若者を取り巻く環境には、恋愛はつきもんですから、無関心でもいられます。でも私には、男性に恋愛感情を抱くのは、男性に屈服し隷属することしか思えず、それは到底、プライドが許すことではありませんでした。対象が女性ならまだ許せるが、当時の私は、同性愛とは生まれつきのものであって、私はそのようには生まれついていないから無理だと思っていました。それで、同性愛者になれないことをひたすら悔やしがっているのが、若い頃の私でした。後年、神経科の主治医にそれを話すと、「あなたが若い頃は、社会がそれについて行かなかったでしょう。でも今なら、それはすごいメッセージになりますね」と言われました。

さてそのうちに、「同性愛とは、生まれつきの特異な人たちだけのものではないらしい」と思い始め、「よし、努力して私の同性愛的傾向を開発するぞ」と決意しました。「努力して開発する」という所が、いかにも私らしくて笑ってしまいます。でも私は、自分が男性に全く興味を持ってないタイプの人間ではないことを知っていましたから、常に努力を怠ってはならない、と警戒していました。それは随分、不自然なことかもしれませんが、でも摂食障害という病気を何十年も背負い、人間の最も根源的な欲求である

食欲すらも、意志の力で制御しようとあがき続けてきた私です。性志向を意図的に操作しようと決意するくらい、何ほどのことでもありません。そうまでしても守りたいものが、私にはあったのです。

男女の区別にそこまでこだわる自分を、人間としてひどく貧しい者と感じる気持ちもあります。ここで言う男性とは、身体も性自認も男性である人のことであって、性同一性障害やトランスジェンダーの人は含みません。にしても、ある人が男性であるかどうかによって、自分にとって警戒すべきか否かを判断するというのは、その人の人間性などは全く無視しているということです。これは？逆差別ではないか——
でも、例えば日本社会に根を下ろして生活している在日朝鮮人が、「国籍だけは日本人にはならないぞ」と、民族籍にこだわること。その「こだわり」が背負っているものの重さを考えるなら、「国籍だの民族だのにこだわるなんて、人間として小さいですよ」などは、言えるはずがありません。その「こだわり」は、在日朝鮮人という存在の歴史・社会性を、我々に向って訴え続けているのです。ならば私の、セクシュアリティに対するこだわりも、あの主治医の言葉通り、女性という立場からの、1つのメッセージかな、と思うんです。

好悪という自然発生的な感情を、意図的に操作するという点でもう1つ。私はアジア人やアフリカ人が好きですが、意識的にそう努めている所があります。幼少期から刷り込まれてきた白人崇拜の裏返しです。西洋人の顔立ちや体つきを「美」の規範とし、「欧米先進国」に追いつくことを国民の目標としてきた時代に育てられた日本人の1人として、それを恥じて反発する意図が働いています。

さらに。これを光円寺報に告白するのは勇気のいることです。が、私の仏教への関心も、そのあたりの「不純な動機」から来て

いるのです。「東洋は西洋に比べて、何もかも劣っている」という意識を刷り込まれて、自分が東洋人であることを恥じていた私が、「東洋にもこんな偉大な叡智があったのか」と活目させられたのが、仏教であったということ。若かった当時は、やっと「東洋人の誇り」を持てたようでした。私のものですが、今考えてみると、すごく恥ずかしいです。東洋で発生し、東洋に広まった教えでなければ、私は仏教を好きにならなかったかもしれない……それは、私の考える仏教の中身とは、相容れないものように思えます。東洋だの西洋だの、そんなこだわりを捨てた所に、仏教の真髄はあるのではないかと。「東洋の宗教だから仏教が好き」なんて、仏教を嫌いな人よりもたちが悪いんじゃないか？こんな不純な動機で仏教のまわりをうろろしている私なんて、真剣に仏教を信仰している人々に、顔向けができないじゃないか……

でも、もしかして私は「こだわること」にこだわっているんじゃないか、という気がしてきました。「東洋は何もかも西洋に劣る」と刷り込まれて、何とか東洋人の誇りを得たい、とあがいてきたこと自体、私が時代性と社会性を生きてきたことの証の1つでしょう。現実に、この社会に差別があり、格差がある以上、「劣った者」と位置づけられてきた者が、それを誇りに転じたい、と願うのは当然のこと。そのために何かにこだわることも、また必要なのではないでしょうか。どんな道をたどってここまで来たかは問わず、仏教という大樹は堂々とそびえ立っている……そんな気がします。

2010.5.10 1:30AM*

映画「もののけ姫」の上映パンフレット宮崎駿インタビュー

「日本人はシシ神を殺して、人間として一番核になる部分をなくした」より
つつましく暮らしている事自体が自然を破壊しているという認識

宮崎 昔は、人間以外の物の命を奪うにしても、ためらいを持っていた。それがなくなつた。そういうふうには社会全体が変化したんです。人間が強くなつた分、止むを得ないつていうせつなさがなくなつて、ものすごく傲慢になってきていると思います。人間の文明の本質の中に、他の生物から生命を奪つて、自分たちだけがどこまでも豊かになろうとするものがあるんじゃないかとも思います。

深山幽谷、山奥に行くと、人間が踏み込んだ事のない深い森には清冽な水が流れてるっていう場所が、日本人の心の中にずっとあった。そこには里では見かけない大蛇や、恐ろしいものもいるというふうにある時期まで、思っていた。そういう深山幽谷で、人氣がなく、神々しい場所、そこにいろいろなものが生まれてくる根源があるっていう気持ちには、僕の中に今でもある。日本庭園なんっていうのは、神々しい、清浄な世界をそこに作ろうと思つたのには間違いないと思いますしね。清浄っていうのは、日本人にとつて一番大事な事だったんですよ。

なくしたんですよね、それを。僕は国家としての日本にはこだわってないつもりなんですけれど、この島国に生きている人間として、一番核になる部分をなくしているんじゃないかっていう気がしています。それが実はこの島に住んで来た人間たちにとっての大事な根っ子だったんじゃないかと僕は思うんです。

それはこの世界が、人間のためだけのものじゃなくて、世界にいる全てのためのもので、その横の方で人間もついでにちよつと生かしてもらっているんだっていう考え方に繋がるでしょう。

人間が普通につつましく暮らしている分には自然と共存できて、ちよつと欲張るからだめになるということではなくて、つつましく暮らしている事自体が自然を破壊しているんだっていう認識にたつと、どうしていいかわからなくなる。どうしていいかわからないところに戻行つて、そこから考えないと環境問題とか自然の問題はだめなんじゃないかなって思うんです。

(長田浩昭さん配布資料5/1)